小児アレルギー疾患の発症機序に関する検討 ―妊娠中から乳児期の食物と上気道感染について―

小田嶋　博*、西間三馨**

要約：小児気管支喘息およびアトピー性皮膚炎患者（４歳以下、80名）の初診時の病歴および血液学的検査結果を検討し次の結論を得た。1.血清IgE値やアトピー性皮膚炎の発症は家族歴と関連が深かった。2.家族歴にアレルギー性疾患を有する場合には妊娠中は卵や牛乳の摂取は控えた方がよい。3.アレルギー性疾患の家族歴がある場合には、あえて無理に母乳を与えなくても良い可能性がある。4.離乳食は早く与えない方がよい。5.いわゆる風邪をひきやすい子、は喘息になりやすい。

見出し語：気管支喘息、アトピー性皮膚炎、血清IgE、家族歴、母乳、離乳食

研究方法：国立療養所南福岡病院小児科を昭和63年から平成１年の２年間に受診した４歳以下の気管支喘息（喘息）またはアトピー性皮膚炎(AD)および両者の合併した患者を対象とした。初診時のアンケート形式の病歴に関する質問に対する回答（特に家族歴、妊娠中の母親の栄養法、ミルクの開始の時期、離乳食の開始時期）と血清IgE およびIgERAST の値について検討した。

結果：【血清IgEの値と家族歴】家族歴で３等親以内のアレルギー性疾患の有無と血清のIgE 値との関連をみた。対象を０－２歳と３－４歳の２群に分けて検討したが３－４歳の群では家族歴のないもの（平均667U/ml）は、家族歴のあるもの（1168U/ml）より低値を示していた。

【ADと家族歴】乳児期のADに関しては家族歴のアレルギー疾患の有無は関係がなかった。

【妊娠中の栄養法、家族歴と乳幼時期のAD,IgE】対象について０－２歳、３－４歳の２群をさらに、家族歴にアレルギー疾患のある者とない者の４群に分けて検討した。すると０－２歳で、家族歴のない者では、妊娠前に比べて食餌内容を変えなかった群に比べて乳製品や卵製品を多くとるようにした群では乳児期にADを認めやすかった。

血清のIgE値に関しては０－２歳の家族歴のない者で、卵や牛乳を多くとった者では食餌内容を

*国立療養所南福岡病院小児科（Department of Pediatrics, National Minamifukuoka Chest Hospital）**国立療養所南福岡病院（National Minamifukuoka Chest Hospital）

変えなかった者に比べて来院時の血清IgEが高い値を示していた。

0－2歳の家族歴のあるものでは卵、牛乳製品を制限したものではそうでない者に比べてIgE 値が低い傾向にあった。また3－4歳で家族歴が陽性のもので、卵を食べるように努力した者では卵にたいするRASTの陽性率が高い傾向であった。

【授乳中の母親の栄養法】0－2歳で家族歴がある者では妊娠中に卵や牛乳を多くとるようにした者ではIgE値が高い傾向であった。

【乳児期の栄養法】乳児期の栄養法について母乳、人工、混合の各栄養法について 検討した。血清IgE値について検討すると3－4歳でアレルギー性疾患の家族歴がある者では血清IgE値の平均は母乳栄養児で1856U/ml、人工栄養児では771U/ml、混合栄養児では533U/mlであり母乳栄養児では血清IgE値は高い傾向が認められた。この傾向は3－4歳の家族歴のないものでは認められなかった。

【離乳食】次に離乳食の開始月数について検討した。3－4歳では家族歴に関係なく離乳食の開始時期はIgEの値と逆相関を示した。

ミルクの開始時期に関しては0－2歳で家族歴にアレルギー性疾患がみられるものではミルクに対するRASTスコアと逆相関する傾向がみられた。

卵に関しては0－2歳で家族歴が陽性のものでは卵に対するRASTscoreが卵の開始時期の早いもので高値をとる者が多くみられた。また3－4歳で家族歴のないものでは卵RAST値とIgE 値とが、離乳食開始時期に対して、逆相関する傾向がみられた。

【感染の影響】肺炎に関しては「ある」と答えた者と「ない」と答えた者の差はなかった。これに対して風邪をひきやすいかという問については、ADでは「いいえ」が多く、喘息群では「はい」が多いという傾向がみられた。

考察：今回の検討から改めてアレルギー疾患の発症には家族歴がIgE値やADの発生に対して大きな要素であると考えられた。家族歴にアレルギー疾患をもった母親が注意すべきこととして妊娠中に卵、牛乳を控えることはIgEの値を高くしない、特異的RASTの値を上昇させないなどの点で有用と考えられた。

乳児期の栄養法では、母乳をすすめることは今回の結果でみるかぎりIgE値だけからいえば必ずしも重要ではないのかも知れない。このことは、さらに詳しく検討する必要があり、アレルギー疾患の家族歴を有する者は母乳を与えないほうが良いなどの結論を早急にだしてはいけないのは勿論である。

いずれの場合にも離乳食の開始は遅くした方が無難であろう。また、喘息の発症に関しては所謂風邪を頻回に繰返すという印象を親が持っているようである。

Abstract

Influence of some factors on the onset of allergic disease.

Hiroshi Odajima, Sankei Nishima*

Eighty patients, aged 4 years or less, was studied to clarify the influence of some factors on the onset of atopic dermatitis and／or asthma. Positive family hostory of allergic disase, early beginning of the weaning and mother's effort of taking of egg or cows milk at pregnant may effect on the onset of allergic disease.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:小児気管支喘息およびアトピー性皮膚炎患者(4 歳以下、80 名)の初診時の病歴および血液学的検査結果を検討し次の結論を得た。1.血清 1gE 値やアトピー性皮膚炎の発症は家族歴と関連が深かった。2.家族歴にアレルギー性疾患を有する場合には妊娠中は卵や牛乳の摂取は控えた方がよい。3.アレルギー性疾患の家族歴がある場合には、あえて無理に母乳を与えなくても良い可能性がある。4.離乳食は早く与えない方がよい。5.いわゆる風邪をひきやすい子、は喘息になりやすい。